

研修会報告

2020 年度滋賀支部主催第 1 回資格更新研修会

2021 年 3 月 7 日（日）
日本臨床発達心理士会滋賀支部主催

講 師：土肥いつき先生（京都府立城陽高校）

テーマ：「問題の所在はどこか？」—L/G/B/T's の子どもたちの存在が問いかけるもの—

土肥先生は、トランスジェンダー・性同一性障害や多様なセクシュアリティへの理解を深めるための講演・執筆を多数されています。セクシュアリティの知識を獲得する中で、自分がトランスジェンダー・性同一性障害であることを知り、以後女性へのトランジションを開始されたということです。

ご講演では、まず最初に、「セクシュリティとは？」という話がありました。

人間の性を考える要素としては、①身体の性、②性自認：自分の性をどうとらえるか、③社会から要請される性、④性的欲望の対象が何か、があるということです。

そして、それぞれのセクシュアリティのバリエーションにも説明がありましたが、その表現の仕方にはいろいろあることも学びました。

トランスジェンダーという言葉に対し、いわゆる、自分の身体の性と自認が一致して異性を愛するものを「シスジェンダー」と言われていました。恥ずかしながら、私は初めて聞いたのですが、わざわざこの言葉が使われる背景は、「一般的な」とか「普通の」と言ってしまうと、トランスジェンダーが「普通でない」という意味になってしまうからでしょう。どちらも型の 1 つという認識、トランスジェンダーの特別感をなくすために必要なのだと、改めて言葉の使用についても考えました。使用する言葉の中に、自己の無意識に持っている常識や価値観が現れるのだと改めて思いました。

今回の講演に当たり、土肥先生から「LGBT について考えることは、単に『少数の人々の問題を理解し、配慮する』ということにとどまるものではありません。そこには、LGBT の存在を通して、私たちの社会がどのような規範でできているかということ、セクシュアリティから考えるという「問い」が提示されているのです。」という言葉が滋賀支部役員会に届けられていました。

滋賀県は、かつて近江学園の糸賀一雄先生が、「この子らに世の光を」ではなく、「この子らを世の光に」なのだとおっしゃったことで有名ですが、まさにこれと同じく、マイノリティの人々を理解し支援するだけでは、不十分だということでしょう。

特に、LGBT の抱える困難についてのお話では、一つ一つなるほどと思えるものでした。偏見でカミングアウトが困難であるということについては、すべてのマイノリティに通じるものがあると思います。

土肥先生は「子どもの幸せには、子どもに働きかけるよりも環境に働きかけること」とおっしゃっていましたが、LGBT の問題においても、変わるべきは社会であり、社会受容が重要なのだということも改めて思いました。マイノリティの問題は何事においても、個別配慮していただくだけでは、あなたは「支援を受けて生きる存在だと教えることになる」ということも心に留めておきたいと思いました。

また、『嘘をついてしまった』と、自分で傷つく」とおっしゃったのが印象的です。確かに明らかな嘘だけでなく、正直に言えなかった、隠したというだけでも、そういう自分に悩むことがあると思います。臨床をしていると、自分のことだけでなく家庭に事情がある場合、親やきょうだいのことを聞かれて嘘をついたとか、本当のことが言えなかったとか、そういったことにも出合います。その気持ちを傾聴することしかできないのが現状ですが、本来、隠さなくてはいけない気持ちにさせられる社会の在り方が問題であり、それを変えていくことが重要なのだと思います。

今回は LGBT について学習させていただきましたが、いろいろなところに発想を飛ばすこともできました。個別対応の多い発達臨床の仕事ですが、自分のもつ常識・価値観を見直す姿勢を常にもち、必要ならば社会に働きかけられる己でいなければならないことを学んだように思います。

（滋賀支部 磯部美也子）